

信濃教育

巻頭言

倭事件

南安曇郡倭小學校は、昭和四十六年梓川小學校と統合した。大正時代この倭小學校は信州白樺派の教員たちの教育実践の舞台となった。世に言われる「倭事件」は大正八年に起きた（前年には「戸倉事件」が起こっている）。

坂井陸海（当時二十四歳）、倭小學校において信州白樺派の教員たちが行った新教育の実践者の一人である。新しい教育に対する戸惑いの声が倭村の村民や保護者からあがり、実情調査に高田吉人郡視学が倭小に調査に入るようになった。高田視学官の前で、坂井は算術の授業を行った。以下は「南安曇教育会百年誌」（昭和六十二年発行）をもとに要約する。

坂井は、この問題は五人しかできないだろう、と宣言する。子どもたちは躍起になって解こうとする。結局七人ができた。坂井はできなかった子にどができなかったか発表させる。坂井曰く「即ち私の算術の授業はここからが本筋で、出来なかつた者の方がより多く発言しなければならぬ形の方法をとっていくのである」。クラス中が発言だらけとなる。出来た七人と坂井とが教師になって、他の子どもを教えるのである。

坂井の授業を高田視学官は一時限から五時限まですべて参観する。そしてこう感想を述べるのである。「ああいうふうに、児童の要求によって、教授をすすめるのが私は本当の教育だと思ふ」

坂井が倭小を追われることになる「倭事件」は、彼らの教育が、今までの教育と違いすぎ、村民や保護者に受け入れられなかつたこと、そして教師たちも理解してもらおう努力をしなかつたことが要因の一つであると言われる。しかし彼らは、画一的形式主義の教育を打破しようとした。子どもの個性を尊重し伸ばそうとした。そしてなによりも子どもへの愛情にあふれていたのである。

坂井陸海の行った算術の授業を再度見てみよう。子どもたちは意欲的に追究し、協働的に学んでいる。今から一〇〇年以上も前の実践である。高田視学官の言うように、子どもたちの求めを実現していった結果の授業であろう。